

## Monthly Report 月間報告 2003年7月～12月

### 2003年7月

「鍛えるのは強くなるためだけではない…鍛えて弱くなるようにならなくてはいけない。少なくとも、鍛えて強くなることによって人間の弱さを知り、理解が示されるようにならなくてはならない。」「The School is My Church - 霊を磨く場所」赤木英哉著

前号からの続き…

ちょうど数ヶ月前に、団体のビジョンとしてキャパシティービルディング(能力開発)部の設立(月間報告3月号)を掲げ、その準備に取り掛かり始めた矢先に、これら緊急事態に対応せざるを得なくなった現実。大きな目標が自分に与えられたとはいえ、見栄えの良い計画書を書き上げるのも無し、逆に自分の力の無さに気づかされるのが「最初の仕事」だとは皮肉なものです。

力を得ようと思えば思うほど、その力には程遠い自分に気づかされるのが常。分かれば分かるほど、「分からないこと」「知らないこと」がもっと多いことに愕然とするのが現実。しかし、不十分であるのを知っているからこそ、自分の「学習する能力」が開かれていく、新しい思考や行動へ容易に対応できる余裕が生まれてきます。「もう、自分は分かっている」と言う時が、ある意味でその人の能力の限界を意味するのかもしれませんが。

社会心理学、組織行動学の世界的な権威でもあるエドガー・H・シャイン MIT 名誉教授は、朝鮮戦争で捕虜になった米兵士への洗脳に関する研究を通して、学ぶ意欲の原動力となるのは「不安感」やある種の強制力であるという説を打ち出しています。その不安感は上司の指示やノルマなどで駆り立てられるものも多いでしょうが、自分の中にある弱さに自分から気づいていくことでこの不安感に直面する、そして学びの過程へと繋げていくこともあるでしょう。自分一人ではどうしようもないチャレンジ、緊急事態に直面する中で、まだまだ足りない自分を見ていきます。しかし、それはその場凌ぎでなんとか物事をこなすことよりも、状況の本当の理解には必要なステップであることを教えられます。目の前にいる痩せこけた栄養失調児に対して自分は何ができるのか。その本当の答えに近づくにはまだまだ長い道のりが立ちほだかっているように思われます。

## 2003年8月

今月はアメリカのニューヨーク周辺で歴史的な大停電。そして、月末になって今度はイギリスのロンドン市内での停電騒ぎ。今年最初の半年ぐらいいは週2回計画停電だったここエチオピアでは、私も田舎でなく市内であっても電気なしの生活には慣れたものです。

こちらでは電気がなければ会社の仕事はないに等しくなり、周辺も断然静かになります。友人に招かれ、ゆっくりコーヒーの生豆を木炭の火でゆっくり煎るところから始り、粉に潰し、お湯に入れてはかき混ぜ、ようやく一杯のコーヒーを頂くまでに1、2時間はあつという間に過ぎてしまいますから、電気がないことに苛立つこともありません。また、ガソリンスタンドの燃料も汲み出せず、車やトラックも立ち往生。それでも、荷物運びには電気のいらぬ頼もしい見方、動物達が至るところで待っています。ロバは藁からブロック、水、家具、セメント、穀物まで何でも。牛はあまり都心では相手にされないのか、道端に限らず最近流行のインターネットカフェの前でもどっしりとお休み。人間がパソコンの小さな画面を1日中見て座っている姿は、しばし牛達の間ではのんびり路上に座って過ぎ行く人達を眺めていることと同じなのでしょう。

先進諸国の停電騒ぎを聞くたびに私は「たかが停電で」と思ってしまうものの、すべてを電気に依存した生活スタイル、社会・経済システムにあっては大事件。残暑厳しい日本の夏も、更にクーラーをフル稼働させていることでしょうし、いつ停電が発生するか分かりません。もちろん、この報告書も電気があり、パソコンがあつてこそ毎月書いて発送することができるのですから、すでに私自身も電気に依存した生活になっているといえそうです。

ただ、電気が復旧した今でも、私は意図的に蠟燭の火で夜を過ごすこともあります。明るすぎず蛍光灯よりも小さな電球ひとつや蠟燭のほうが目にもやさしいことが体験的に分かりました。一方、アメリカでは蠟燭の使い方を知らないのか、停電後の蠟燭による火事が続出したとの事。生活が高度になればなるほど、逆にシンプルな生き方も忘れてしまうとは皮肉なものです。選ぶのに困るほどのモノに囲まれて生活することが、必ずしも満足感を与えるわけではないのは分かっていますが、その生活スタイルを変えることは簡単ではありません。モノがあるか、ないかではなく、どんな状況にあつても「満たされる」生活でありたいです。

「たかが停電。されど停電」で大きな事件となる先進国。紛争、政権交代、反政府組織の暴動、旱魃被害などイメージの悪いニュースが頻りに流れる傾向のあるアフリカ。いつになったら「エチオピア大停電」というニュースが世界に流れることか楽しみなものです。

2003年9月

「しっかり稼いで、親に楽させてあげたい」

長距離陸上で世界的にも優秀な選手を輩出しているエチオピアには、将来有望な若手ランナーがたくさんいます。先日、日本のテレビ番組でその様子が放映されており、世界的にも有名になった選手には、国を挙げてその選手の生活を保障するシステムがあることも触れていました。また、彼らがなぜランナーとして有名になりたいのかの理由が、まさに自分が食べられるようになるだけではなくて、自分の両親、兄弟などの家族のためだと言うのです。

「親を殺して自分たちも死ぬつもりだった……」

私が1ヶ月前に日本に帰ってきたからというもの、連日のように奇妙な殺人・殺傷事件や誘拐事件が続出。そして、自分が心中する前に自分の両親を刺し殺してしまう青年が逮捕された事件が起きたのには驚きと同時に、日本もそこまで来たかという感を拭えませんでした。

この世における自分の存在を消すだけではなく、その周りにいる者、ましてや家族までも抹消してしまうという恐ろしさ。満たされぬ思いからフラストレーション。そして、行き着く所が死という、なんともいえない閉塞感のなかに生きる日本。自分の存在価値を自分のなかだけに留めて行った結果がこれなのかもしれません。

一方、エチオピアではその日を生きたがために必死となる故か、自分のことだけではなく他人のことをも人生の中に自然と位置づけることができる。もちろん、金稼ぎを夢見て多くの若者がランナーとして認められたいという下心はあっても、その先には自分の存在は家族やのためでもあるという自意識はあります。

次号に続く……

## 2003年10月

前号からの続き・・・

国連が制定した世界食糧デー(10月16日)を記念した行事が日本全国で開催され、その現地活動報告者としての巡回が、この約1ヶ月間を経て無事に終了しようとしています。15分から40分といった時間をいただいて、エチオピアの飢餓の実情、私たちの働きの紹介などをさせていただいたわけですが、この短い時間でエチオピアを語りつくすことはできないという思いがいつもありました。貧しくても少ないものを分かち合って生き、家族思いのすばらしい人々がいる反面、自分の政治的な私利私欲で貴重な食糧を操作したり、飢餓を野放しにしている現実もあります。不可解な事件が続出する日本と同じように、様々な過ち・罪を犯す人があるという面では変わりはない訳です。しかし、その場所がどこであろうと、一番大切なのは「他人のことを考えられるか」ということのように思います。個性重視の教育ということが叫ばれるようになって久しい日本ですが、これはある意味で本来人間があるべき姿と逆行する考えのように思えてなりません。

自分は一人では生きていけないということを認める。親がいてこそ自分がある、ということを感じて受け取れるようにするのが本来の教育の目的ではないでしょうか。「ありがとう」という言葉の逆は「(いて、してもらって)当たり前だ!」という言葉である、と知人がいったのを覚えています。今でも飢餓に苦しむエチオピアにあって、「どれだけ多くのお金をつかって、どんな大きなプロジェクトして人々を救えるか?」を考えるよりも、まず「感謝あり」、「感動あり」、そして人との関係のなかで「自分は生きていてもいいんだ」という「確信のある生き方」を自分から実践したいものと思わされる昨今です。

2003年11月

「某国際 NGO が現金配布型の緊急援助を開始」  
(エチオピアの新聞・ザ・デイリー・モニターより)

昨年の旱魃などで飢餓に瀕しているエチオピアのある地域に対しては、外国から運ばれてくる食糧(小麦など)を配布し、その見返りとして被災民たちが地域のインフラ整備や地域復興のための諸活動に参加してもらうというスタイルが一般的でした。ところが、その食糧を配布するにも道路・倉庫などのインフラが整っていないエチオピアにあっては、輸送・貯蔵コストが膨大に掛かること。また、食糧を住民が受け取ってもその一部を売って塩やその他生活必要物資を購入する資金に当てている背景から、これからは住民に対して現金を直接手渡し、食糧難という緊急事態とそれを取り巻く貧困を取り除こうと新たな取り組みが、ある一部の NGO を通して始まっているのです。もちろん、これは生活基盤を支えるだけの物資がしっかり流通している市場がなければ成り立ちませんので、すべての場所では適応できない方法です。しかし、食糧をひとつの地域に配布する過程でさえも、様々な政治権力が絡んで紛争を引き起こす火種にもなり得ているのに、そこに現金を持ち込むとなると、援助を実施する団体は大きなリスクを負うことになるでしょう。

また、自立への道は程遠いと思われるほどの厳しい自然環境の中、農業生産が可能な肥沃な土地へ、住民の自主的な再定住計画も実施されています。一方で、穀物が余剰生産されている地域からその穀物を政府が買い付けて、食糧不足地域へ分配するという制度も始まっており、現在エチオピアの食糧安全保障が真剣に討議されています。

これらはエチオピアの人々の生活における、「ハード」面での対応です。食糧確保のためのシステムから、道路・学校・保健所などのインフラ整備、農作物の品種改良と普及など上げたらきりがありません。ある意味、これらは数値などで分析可能な分かり易い取り組みである一方、その分析をするはずの人間、つまりは「ソフト」面を忘れがちです。制度を考案するのは誰か？その結果何が改善したのかを評価するのは誰か？その後何がどう変わるべきなのかを判断するのは誰か？人間に他なりません。もちろん、人間ひとりひとりや人間関係・組織が作り出す能力などを取り上げていたら、それぞれの持つ欠け・弱さに向き合わねばならず、まずお互いの信頼を得るまでに時間が掛かります。そんな面倒なことをするより、聞こえのいい「戦略」「長期計画」「デザイン」といったタイトルのついた「ハード」への取り組みのほうがよっぽど楽ですが、すでにそこでは物事の本質を変えていこうという意欲や創造性が失われていくような気がしてなりません。

「ハード」「ハコモノ」は人間が作り出します。しかし、それによって人間自身も「ハコモノ化」してしまう恐れを最近感じます。つまり、「この戦略さえ踏んでいればいい」「制度ではこうなので、どうしようもない」「自分の力は微々たるもの。目の前のものをこなしていればいい。」という無力感が蔓延することです。もっと人は生き生きし、希望、夢に溢れ得る存在なのに、です。

私の属する団体名が「Food for the Hungry」であるだけに、エチオピアにあっては多くの人に「食糧を配布しているだけの団体」と誤解されがちです。すでに現金配布による援助も存在しているだけに、一歩間違えれば「Money for the Hungry」としての機能が期待されかねません。しかし、こういうときだからこそ、しっかり夢やビジョンをまず自分の内に秘めてそれを語り、人々の心に希望を起こし続ける者でありたいです。

## 2003年12月

アフリカのある部族の挨拶が、英語の「Hello」にあたる言葉で「私にはあなたが見えます」という意味だということをお本で読みました。これは「人は、他の人がいるおかげで人間になる」という民族の諺が由来であるといえます。つまりは、他人が自分を見る、認知するまでは自分は存在しないということです。忙しさにかまけて、通りすがりの同僚に挨拶し損ねるといったことはよくあることですが、この民族の価値観からすればそれは到底許されない行為になってしまうようです。

エチオピアにも様々な民族、それぞれの言語がありますが、「元気か」「元気です」といった挨拶の表現を、一度だけでなくこれでもかというぐらい何度も繰り返す習慣があります。最初は外国人である自分がしっかり言葉ができないので、繰り返してくれているのかと勘違いします。逆に現地の言葉を使ったとしても、私の感覚で「元気か」を一度だけしか言わないと、相手は どうも物足りなさそうな顔。あたかも、相手の状況、健康を何度も繰り返し尋ねることで相手の存在を認め、そして自分の存在も認めてもらうといった感じです。

相手を認める、尊重するといったことはどの社会でも大切にされるものですが、実際にはまず自分が最初に認められることを求めてしまうのが常です。自分が頻繁に使う口癖からでもすぐにそれが分かります。例えば、他の人の話を聞いた後の反応として「いや、でもね・・・」「だからね・・・」と否定する形と言ってから切り返すことなど。もちろん、相手が話す内容があまりにも賛成できない、好ましくないものであったとしても、聞いた後に出てくる言葉としては、やはり私もつい自分のことを先に認めてほしい、何より自分の方が正しい、という前提にたったも

のがよく出てくることに気づきます。これでは、相手も「聞いてくれている」という感覚が失せるだけでなく、それ以上の話を「分かってくれる」とも思えないので、話を続ける気力がなくなってしまいます。かといって相手の言うことを、ただ頷いて聞くだけでいいということでもありません。

コミュニケーションは単なる意思疎通の手段や情報交換といった意味を超えて、相手の話すことやその人の存在に対する関心や思いが自然と湧き起こされるプロセスでもあると思います。「私にはあなたが見えます」を意味する簡単な毎日の挨拶が、相手の存在を認めるかどうかという点にまで影響してしまうことからすれば、コミュニケーションは手段以上のものです。そうでなければ、会話の切り返し方にしても否定形を使わないで、いつも「そうだそうだ」と相手を肯定する言い方、つまりは単なる方法論で終わってしまいます。

日頃、「あなたの存在を認めます」という感覚を持ちながらの挨拶をするのは、私達にとっては難しいことかもしれません。しかし、ほんのちょっとした言葉で自分が励まされ、また元気が出ることもあると同時に、失望させられることもあるという点では、言葉はまさに「ちから」です。

地位、名声、学歴、業績、お金が力とされる社会にあっては、言葉そのものの持つ力に関心が向けられることは稀です。それは深く考えるに値しない当たり前のことだからでしょう。しかし、生まれてから今日まで、毎日自分のなかで、そして他人の心の中へも積み重なってきている唯一のものは、自分の発している言葉です。どういう言葉を発するかで、人生が決まってしまうともいえるのかもしれません。言葉もひとつの資本です。これを大切にしながら来る新しい年を迎えたいと思います。